3 人のブリューゲル
―オリジナルとコピーをめぐる考察―

九州大学大学院人文科学府博士後期課程　香月 比呂

16 世紀ネーデルラントの画家ピーテル・ブリューゲル 1 世（c.1526-1569）の息子ピーテル・ブリューゲル 2 世（c.1564-1636 年）とヤン・ブリューゲル 1 世（1568-1625 年）は、幼くして父を亡くしたものの、おそらくは画家であった祖母マイケン・ヴェルフルストの手ほどきを受け、長じて画家となった。長男ピーテル 2 世は市場の需要に応え、自ら構えた工房で助手たちとともに父ピーテル 1 世作品のコピーを大量に制作したことで知られる。一方、次男ヤンは精緻な風景画や花々の絵に才能を発揮し、ミラノ大司教でもあったフェデリーコ・ボッローメオ枢機卿をはじめ有力者のもとで仕事をしたが、やはり少数ながら父作品のコピーを制作している。

ピーテル 1 世の死後、家族のもとには彼の作品のみならず作品の制作に用いた下絵が残され、二人の息子たちはそれらを用いてコピーを制作したと考えられている。つまり、彼らが一部の有力者によって秘蔵されたピーテル 1 世の作品や、その下絵を実際に目にすることのできた数少ない後継者だったならば、彼らが制作したコピー作品は、いわばピーテル 1 世のオリジナル作品を最も深く理解した「受容者」の証言として、ブリューゲル研究における極めて重要な手掛かりとみなせるのではないだろうか。ピーテル 1 世の作品構想や制作の過程については、注文主や注文の経緯に関する一次資料の不足も手伝い、未だ解明されていない側面が多い。よって本発表では、二人の息子たちによるコピー作品を通して、遡及的にピーテル 1 世によるオリジナル作品の考察を試みる。

現存するコピー作品、とりわけピーテル 2 世の工房で大量生産されたコピー作品は、もっぱら商業目的のために制作された単なる複製品として長らく等閑視される傾向にあった。しかし近年では、C. キューリと D. アラート両氏らが実施した科学調査に基づく分析によって複製手法の一端が明らかにされるなど、その再評価が進んでいる（*Brueg[H]el Phenomenon* [2013]）。本発表では、今後さらに活発となることが予想されるブリューゲル作品のオリジナルとコピーをめぐる最新の研究動向を鑑み、具体的な事例に焦点を当てながら、ブリューゲル研究におけるコピー作品の有用性を問い直したい。